

西九州研修の旅

岡島秀隆

はじめに

の感想をおりまぜて記すこととした。

七月二十七日から二十九日迄の三日間に、参禅会研修団は、熊本——天草・雲仙——長崎の各地を訪れ、宗門の大慈寺、皓台寺及び本光寺を拝登した。そして、この拝登を通じて、我々はこの地が曹洞宗と深い縁によって結ばれていることを再認識させられたのである。しかし一方で、この地方には外来文化との絶えざる邂逅の歴史があった。中でも、日本における仏教とキリスト教という二大宗教の初期の出会いがこの地でなされたということは、明確に記憶されねばならない。この地の曹洞教団もまた正にこの邂逅の一方を担うものとして、変動する時代の中に生きてきたのである。

ただ、この地の仏・基の交渉の歴史やその意味づけをこいでなす余裕はない。そこで、以下の旅行記録では、かかる解釈学は、読者諸兄におまかせし、この地の歴史が如何に多彩な要素を持つていてかを、少しく紹介できればと思い、旅程をたどりながらそこへい

西九州研修の旅（岡島）

七月二十七日（金）晴 名古屋——熊本——本渡

9..15 名古屋空港全日空カウンター前集合。

10..00 ANA-F331 便に搭乗。竹田学長を団長に総員二十名は熊本空港へと旅立つ。

11..30 熊本空港到着。バスに乗り換え、水前寺公園に向う。

12..30 公園前、水前寺ペーリングステーションで昼食。団長先生より挨拶。

昼食後、水前寺公園を見学する。この公園は、日本三大名園のひとつに数えられ、正しくは「水前寺成趣園」という。寛永九年（一六三二）、初代肥後藩主細川忠利公が自ら建立した水前寺の跡に築造を開始し、光尚公、綱利公の三代にわたって完成されたという桃山式回遊庭園である。東海道五十三次を模した園内は、水前寺富士と呼ばれる小山を中心に、リズミカルな縁の起伏にうめつくされてい

西九州研修の旅（岡島）

た。驚くべきことに、どこでどのようにファインダーを覗こうとも、それらは実に優美な構図をかもし出すのである。全ての光と影が、水辺に映る木立の姿さえ、巧みに構成されている。また、一隅には明治時代に桂離宮から移築されたという名高い「古今伝授の間」や「出水神社」がある。

13..20 水前寺公園出発。当初の予定を変更して大慈寺へ向う。（予定は、県立美術館を経て大慈寺へ向う筈であった。）

13..45 大慈寺到着。早速に松倉操雄住職と会見。団長先生より、今回の訪問にあたって、熊本県立美術館に寄託されている数々の寺宝を拝見させていただくため、格別のご配慮をお願いした松倉老師への御礼と拝登の挨拶があった。住職からは、大慈寺の沿革及び、現在進行中の復旧作業の状況などの説明があり、以後しばし歎談。外では真昼の陽光があつい。

大梁山大慈禪寺は、弘安元年（一二七八）この地の土豪河尻泰明の外護をうけ開創された禅刹である。後鳥羽上皇の第三皇子といわれる寒巖義尹禅師を開山とする、言わゆる寒巖派の本山で、龜山法皇から紫衣の允許と「勅願大慈寺」の勅額を賜った大道場である。歴代皇室の尊崇厚い鎮西随一の名刹とされ、今日に至るまで、多くの災禍にあいながら脈々と法燈をかかげてきただけに、幾多の文化財を有している。

進行中の復興が一日も速くなされんことを祈念しながら仏殿にて読経。殿内には、寒巖禅師自作といわれる県下最大（丈三・五メー

トル）の木造釈迦如来坐像を中心、両脇侍立像の計三体が安置されている。その後屋外に出て寒巖禅師御廟をおたずねするに、どこからか蟬の声などするを聞きつつ汗拭つたことである。

14..30 寺宝の拝観に思いをはせながら大慈寺を発つ。

15..00 熊本県立美術館到着。熊本城を間近にのぞむ近代建築である。特別室に案内され、国宝の寒巖義尹禅師像、「寒巖義尹禅師発願文」、また狩野探幽筆維磨居土像、釈迦文殊普賢三幅対、釈迦牡丹図三幅対、開山頂相など拝見する。

16..00 美術館を発つた一行は、一路天草本渡のホテルへと向う。少々疲れのみえる団員諸氏は、一日のスケジュールを終えた安堵感もつだつてのことだろう、ガイドさんの説明に耳を傾けつつ休息をとる。みすみ三角を過ぎ、天草ペールラインに入る頃、大きく西に傾いた陽ざしの中で天草五橋を渡る風は、いくらか柔らいだ涼しさを運んでいた。

18..50 天草国際ホテル到着。

20..00 夕食。団長先生の挨拶。三々五々就寝。

七月二十八日（土）晴一時曇 本渡——雲仙

8..45 出発。

9..00 キリストン墓碑公園着。

ここは、鎌倉初期すでに一帯に勢力をのばしていた天草氏の構え



殉教戦千人塚（殉教公園内）

た本戸城の跡である。キリスト平和像を中心に、無名のキリストン達の墓標が林立している。平和像のもとには、ルイス・デ・アルメイダとアダム荒川の碑があった。当時の領主志岐鱗泉の招きでイエズス会のアルメイダ修道士が初めて来島したのは、一五六六年であった。ポルトガル人アルメイダは医療免許を受けており、総合病院開設、外科医の養成など我国の西洋医学発展の種子を投じた人物である。彼は各地で布教活動に従事したが、一五八三年、この地において生涯を閉じたのである。記念碑には、彼の人間愛に満ちた生涯を記念してと書かれている。切支丹の島といわれる天草の歴史は、まさにアルメイダによつてもたらされたといえよう。

墓地を過ぎると、「天草切支丹館」があつた。ここには、キリスト教伝播から切支丹大名として有名な小西行長の時代を経、天草島原の乱、そして弾圧の中で長く続いた隠れ切支丹の時代へと連なる天草の歴史を証言する品々が展示されている。この地の領主と領民、キリスト者と仏教者、宗教と政治経済などさまざまな糸の織りなす極彩色の綿絵模様がそこにはあつた。

9：30 殉教公園（墓碑公園）をあとにした我々は、十時十五

分、鬼池港からのフェリーで対岸の雲仙口之津港へ向つた。

10：45 口之津港到着。ここはすでに長崎県である。

11：10 原城跡へ着く。原城は一四九六年、時の藩主有馬貴純が築いたもので、一名「日暮城」と云われた。しかし、四代目の有馬直純（彼は切支丹であつたが、夫人が徳川家康の曾孫女であり、

西九州研修の旅（岡島）

自らも家康の側近であつたことなどから、その恩義に報いるため後に棄教している。直純の生涯には、自らの信仰と忠義の狭間に懊惱したこの地方の武士達の典型があり、我々の心を打つ。)が日向延岡に移封された後に領主となつた松倉重政は、関ヶ原の戦い等で活躍した武将であったが、新しく島原城を築くためにこの城を廃した。そして重税と労役を領民に課し、更に厳しいキリストン弾圧を行なつたので、島原の乱の端所はここに現われたのである。寛永十三年(一六三六)島原の乱は起り、二年後、折りしも天草四郎時貞を盟主とあおぐ三万七千人は、ここに八十八日間立てこもり殉教したと言われる。有明海を望む丘の上には小さな地蔵さんが遠く行く舟を眺めていらっしゃる。

11・20 原城跡を発つ。

12・00 島原グランドホテルで昼食。団員中、足立、青山、押田の三氏が一行に別れを告げる。

13・00 島原城到着。この城は、松倉重政が領主となつたとき、徳川幕府の一国一城政策により先に尋ねた南有馬の原城と北有馬の日之江城を壊し、一六一八年から七年三ヶ月かけて造られたものである。あたかも軍艦の司令塔を思わせる豪壮な本丸は、層塔風総塗込様式を特徴とする。今は島原の乱に因んだキリストン史料館となつてている。

天守閣に登つて市内を一望する。思えば天草・島原地方には、「正三道人」「玄々軒」などの号を持つた鈴木正三の話が伝わつて

いる。三河松平氏の家臣の子に生まれ、後に宗門の禅僧となつた正三和尚には、島原の乱に功あつて、後、天草天領となつた折(寛永十八年)、初代代官職となつた弟の三郎九郎があつた。弟を助けんがためにか当地に赴いた正三和尚は、キリストンを排すべく『破吉利支丹』を表わし、天草に三十二の寺院(一寺を除き、すべて曹洞宗)を建て、三年間民衆を接化して歩いたという。長崎皓台寺の庭融頓とも縁のあつたらしい正三和尚は、正に宗教抗争の様相をも呈したこの時代の渦中にあつて、仏教側を代表する人物のひとりといえよう。

13・45 島原城より五分足らず、本光寺到着。当寺は瑞雲山と号し、境内は天正十二年(一五八四)島津、有馬両氏と龍造寺氏が戦つた丸尾城の跡地で、寛永十五年(一六三八)、島原城主高力忠房が戦死者供養のため禅林寺を建立したのを起源とするという。

この島原禅林寺の名は、江戸時代初期に現われた希代の散聖、雲溪桃水(乞食桃水)の住持した寺の名と一致する。桃水和尚は、「穴風外」の仇名で呼ばれた風外慧薰や大愚良寛と共に、歴史上に忽然と出現し、傑出した大善知識でありながら、一生を言わばアウトサイダーとして、脱時代的な孤高に生きた人々の系譜に属している。桃水和尚の伝は、面山和尚の『桃水和尚伝贊』『日本洞上聯燈錄』等に出ており、その消息は今も我々に感銘と教示とを与え続けている。

その後寛文九年(一六六九)、深溝松平家の松平忠房公が丹波福

知山より移封されたときから、淨林寺と改名し、深溝本光寺の末となり、更に、明治八年柏野にあった本光寺を移して今日に至るといふ。島原藩松平家の菩提寺である。御住職の片山仙定老師は、団長

先生と駒沢大学時代の同窓であつた由、茶を飲みながら談笑が続いた。副住職ともども家康ゆかりの大黒天など手ずからお示しになる。中でも驚いたのは、首筋に釘を打たれた木像など隠れ切支丹の信仰の痕跡生々しい品々の説明であつた。資料館展示室のガラス越しにマリア観音など見るのとはほど遠い。本堂にて経をあげ、屋内を辞す。裏手の石段を登り、松平家の御廟、実山和尚の発願によつて成つたという十六羅漢石像など拝見した。

14：40 本光寺発。

15：40 二日目最後の訪問地仁田峠に着く。高所のせいか肌寒い。なお上方の妙見岳にはロープウェイがかけられており、晴天の日は阿蘇の噴煙が見られるという。秋の紅葉、冬の霧氷、春にはミヤマキリシマの大群落が見られ、稀にみる景勝地であるという。うす曇の今時はさりともゆかず、思いを四方の山並に重ねるばかりである。

ロープウェイ乗降口の傍に「大智禪師雲仙地獄偈」の石碑がある。近年、村上素道師によつて建てられたこの碑には、次のような詩偈が刻されている。

地獄天堂一念の中

回光す一念本来空

空々寂々他物にあらず
岩上松青くつつじは紅なり

(林田第壹號著『加津佐史話』より)

大智禪師は極て文才に富み、曹洞宗門有数の詩人と称せられている。その偈頌を収録した『大智禪師偈頌』は、古来禪僧必読の書として、禪寺の小僧は暗誦させられたとも聞いている。葬儀の折、一転語としてよく耳にする「一輪の名月禪心を照らす」の句も『大智偈頌』中のものである。また、大智禪師は先に訪れた熊本大慈寺とも縁が深い。禪師は肥後国宇土郡長崎村に生まれ、七歳の時、川尻の寒巖義尹禪師のもとに入門している。十一歳、寒巖禪師他界するや諸国情脚の旅に出、終いに加賀大乘寺の瑩山禪師の門に入った。二十五歳の時、中国へ渡り約十年の後帰朝。正平二十一年（一三六六）、加津佐の地で病没。行年七十七歳という。

16：00 仁田峠を出発。宿泊地雲仙宮崎旅館へ向う。

旅館裏手は雲仙地獄である。「大叫喚地獄」などと書された立札が随處にある。「今もなほ 丹きつつじの山こめて 聖き血しほの燃ゆるなりけり」（生田蝶介 作）の歌碑と白い十字架の傍を、白衣の修道女達が連れ立つて通り過ぎる。キリストン弾圧の最も厳しかった松倉時代、この地は正にこの世の地獄であった。

19：00 広間にて夕食。行き届いた接待を受ける。就寝。

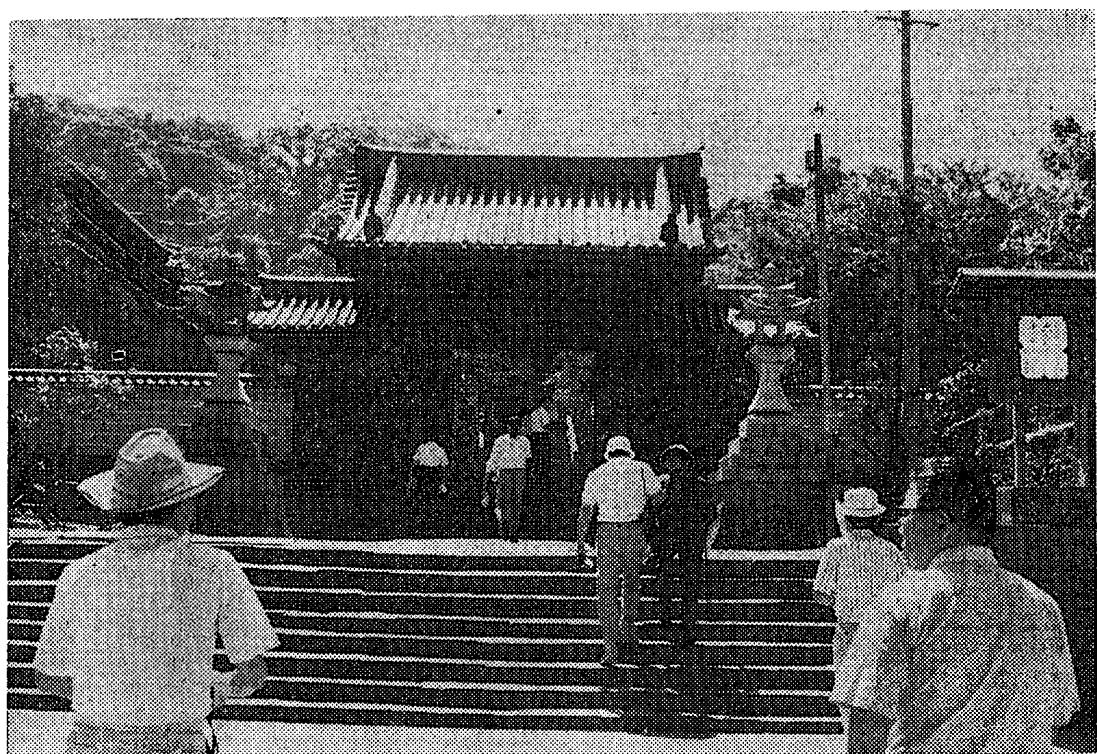
七月二十九日（日）晴 雲仙——長崎

8：00 出立。早朝チラついた雨も止み、長崎市内へと二時間あまりのバスの旅である。小浜港あたり、石油微蓄用のタンカー群を沖に望む。

10：05 皓台寺へ到着。りっぱな山門をくぐり本堂正面に至ると、「萬徳殿」の扁額と白墨鮮かに七仏通誠偈の書された柱聯が眼に映る。まもなく金子住職にお会いして当寺院の近況や沿革などお話をいただく。

当寺は山号を海雲山といい、慶長十三年（一六〇八）肥前平戸の亀翁良鶴が建立した笠頭山洪徳寺を起源とする。元和元年（一六一五）佐賀玉林寺の一庭融頓が勅を奉じて洪徳寺に來錫し伝法開山となっている。一庭はキリスト教徒を説破して転宗を勧誘したと言われる。寛永三年（一六二六）現在の地に移り、同十九年一庭が明正天皇から了外広覺禪師の特賜を得、紫衣を許された。以来寺号を海雲山普照皓台寺とした。さらに、三世月舟宗林が住持に補せられた折に將軍家から時服を拝領してより、当寺住持補任には必ず閣老の連署を要することとなつた。長崎の寺院の格は、故に当山が筆頭とされたという。

本堂で御本尊に拝登の報告をすませ、準備していただいた歴住の頂相など拝見していると、はや暇の時間であった。帰路石段を降りる足をとめてふと振り仰ぐと、形よい山門のシルエットが瞳にとび



皓台寺山門



第一峰門扁額

こんできた。あのすがすがしい印象は今も忘れ難い。

- 11..30 崇福寺に着く。聖寿山崇福寺は、黄檗宗の寺院である。最初に眼にすることのできる第一峰門は国宝建造物として名高い。建築様式などに全く無知な筆者にも、数分前に皓台寺を見学した直後であつてみれば、その彩色、構造上の差異は一見してわかる。『聖寿山崇福寺案内』によると、この寺の建築は三百数十年乃至二百数十年前の南支建築を直輸入したもので、唐工の手に成るもののが多い。我が國には奈良平安時代を経て同化育成された建築様式（和様）と、鎌倉時代に禅宗の輸入に伴つて北宋から渡来した様式（唐様）、そしてこの北支の唐様に対し鎌倉初期に重源上人が東大

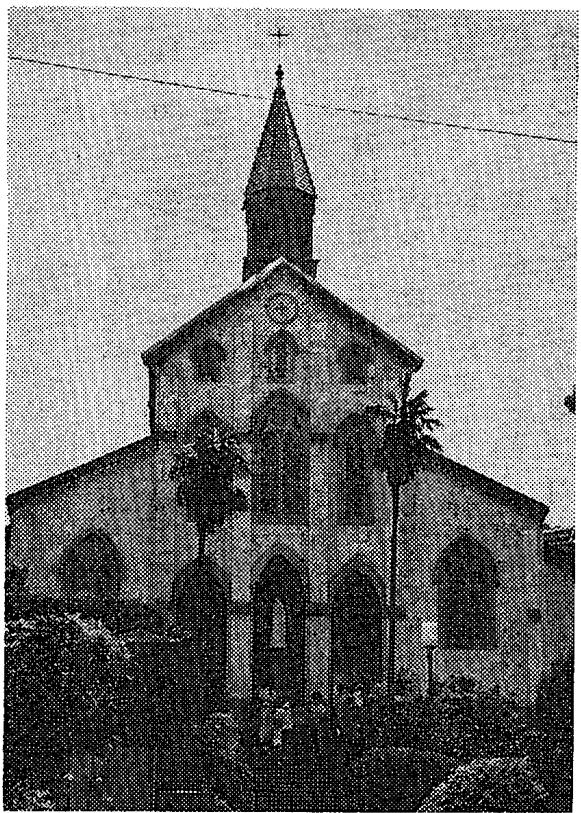
寺再建にあたつて導入した南支「江南」の様式（天笠様）とがあり、このうち天笠様は当初広く普及しなかつたものの、江戸初期になつて崇福寺はじめ長崎の唐寺に直輸入品として再び出現したのである。宇治の黄檗山万福寺もこれにあたり、嘗ての天笠様と時代も隔る故黄檗様とでもいべきものであり、日本に数少ない様式である。

さて、崇福寺（福州寺）は、寛永六年（一六二九）多くの異国人に混じつて長崎に在つた福州人達が、故郷より僧超然を呼び寄せ開基となした唐寺である。市内の興福寺（南京寺）・福濟寺（漳州寺）と合わせて唐三箇寺、三福寺と呼びならわされているもののひとつである。壇越が皆貿易に携わっていたこともあり、海上安全祈願のための媽祖堂がある。海神媽祖を祀ることは唐寺の特色である。順風耳と千里眼にまもられた媽祖の御堂には海外交易華かなりし頃の面影が偲ばれる。また、当寺には名筆の譽れたかい黄檗三僧（隱元・木庵、即非）のうち、開法に隱元隆琦、中興開山に即非如一があつた。大雄宝殿正面に掲げられた扁額「世尊」には、「嗣祖沙門如一即非拝書」とみえた。他に、天和年間の飢饉に縁ある施粥巨鍋など、眼を驚かすものが実に多い。御住職には寺内参観にあたり自ら案内いただいた。厚く謝意を表するところである。

- 12..00 一行は大浦天主堂の膝元にあつた。昼食。
大浦天主堂、グラバー園など散策。汗ばむ陽光の下、石畳をふみしめる我々の前方には、晴れ上がつた空に夏の雲が浮か

14 · 45

平和公園到着。今回の旅行最後の訪問地である。平和祈念像前で戦没者をおもい一巻の経を読誦する。記念撮影を終えた頃から大粒の雨が降り出す。原爆の投下された直後も天気快晴であったにもかかわらず、原爆のガス雲の中から大粒黒色の雨がしばら落下したと記録されている。今、降る雨を背に感じつつそれを思う。急きよバスに退避。隣接する「長崎国際文化会館」へ向う。ここには、世紀の大惨事を物語る原爆資料展示室がある。熱線で溶解したガラス瓶や原型を忘れてしまった金属塊、焼け爛れた人々の背中や腕の写真などが当時を証言している。



大浦天主堂

んでいた。

大浦天主堂は、現存する日本最古の天主堂で、正しくは日本二十六聖人殉教聖堂という。煉瓦と漆喰と木材を適所に配して造られたゴチック風の堂内は、ステンドグラスが涼やかに美しい。

グラバー園は、イギリスの貿易商トーマス・グラバーの旧宅を中心、リングガード邸、オルト邸が集まっている。洋館のベランダからは、長崎港が一望でき、往来する外国船の汽笛に「お蝶夫人」が現われ出るような風情であった。

13 · 50 バスに戻り出発。途中、中古賀べつ甲資料館に立ちより平和公園に向う。

『長崎の鐘』『ロザリオの鎖』などの著作を残された永井隆博士が当時の状況を克明に記された文章が「週刊朝日」昭和四十五年七月

月二十五日臨時増刊号に紹介された。その内から被爆直後の状況をうかがつてみよう。

古ク言伝ヘラレタ世ノ終リノ姿ト云フベキカ、将又地獄ノ形相トデモ云ハウカ。火ヲ逃レテ山ニ這ヒ登ル人々ノ群ノムゴタラシサヨ。傷ツケル者マタ瀕死ノ友ヲ引キズリ、子ハ死セル親ヲ背負ヒ親ハ冷キ子ノ屍ヲ抱キ締メ、必死ニ山ヲ這ヒ上ル。皮膚ハ裂ケ鮮血ニマミレ、誰モ誰モ真裸ダ。追ヒ迫ル焰ヲカヘリ見、カヘリ見、何辺カ助カル空地ハナイカ。誰カ救ヒノ手ヲ借ス知人ハキヌカ。口々ニ叫ビツ呻キツ息モ絶エ絶エニ這ヒ登ル。途中遂ニコトギレテ動カナクナルモノガ続出スル。ソノ最中ヲ狂人トナッテ走リ廻ルモノモアル。……

我々は嘗ての炎土の上に立っていた。高ぶる心をおさえつつ、眞の平和を願わざにはいられない。あの巨大な平和祈念像の右手は天を指し原爆の脅威を、水平に伸ばされた左手は平和を、軽く閉じられた瞼は原爆犠牲者の冥福を祈っているという。今年も巡り来る八月九日に、遙かな地からその姿を見るのである。

15・50 平和公園を発つ。途中で軽い夕食をとつて長崎空港へ。

18・50 ANA-F374 便で長崎に別れを告げる。貿易による文化的経済の大繁栄を享受しながら、他方で幾多の歴史的戦禍の舞台となつた西九州の旅はここに終わりをつけたのである。

20・05 名古屋空港到着。解散。

西九州研修の旅（岡島）

おわりに

此度の『西九州研修の旅』にあたり、お世話を下さった東鉄観光スタッフと現地案内にあたられた堀川バス搭乗員諸氏、更に寺院拝登山にあたり、御多忙中にもかかわらず心暖まる御配慮をいただいた松倉・片山・金子・薬師寺各老師及び寺院関係諸氏には、伏して感謝の微意を表する次第である。また、研修旅行に参加された成河峰雄氏は、事前に『西九州研修の旅 しをり』を作製、配布され、今回の研修を一層有意義なものとされた。改めて謝意を表し、特に記すこととする。